

# 米田のFP通信

ちょっと気になる「保険」や「年金」についての話題をお届けします。

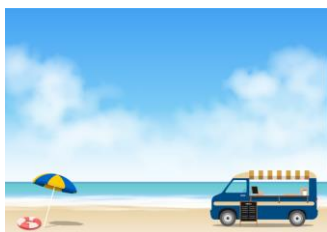
## ご挨拶

7月11日は「世界人口デー」です。

1987年の7月11日に人口50億人目の赤ちゃんが生まれ、それを記念すると共に世界の人口問題への意識を高めるため、1989年に国連により制定されました。

2022年の世界の人口は79億5400万人。国連は2050年までに世界の人口は97億人に達すると予想しています。

日本の人口は1億2600万人で世界11位、前年比10万人の減少です。少子高齢化に歯止めがかかることを期待したいですね。



## 今月号のちょっと気になるお金のコラム

この春は4630万円の誤振込が話題になりましたね。仕事を辞めて4630万円でどのくらいの生活ができるか計算してみました。



1999年からFP業務を行っています。現在はIFAとして最適な金融商品の選定やアドバイス、加入者の方のライフプラン相談、事業承継や相続、保険相談を中心に活動しています。ドクター、企業の経営者から個人まで年間で200人以上の方の相談をさせていただいています。

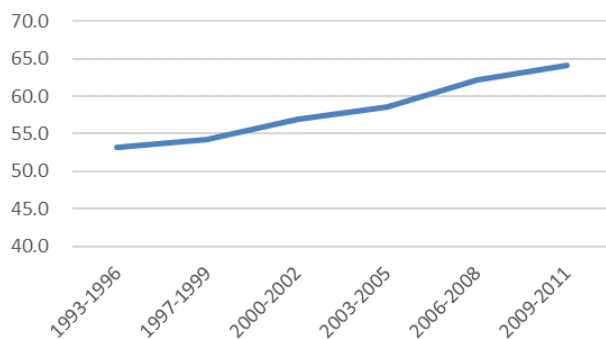
株式会社リスマネジメント・ラボラトリー 大阪支店  
〒543-0018大阪市天王寺区空清町8-33 大阪府医師協同組合東館3階  
電話06-6766-1511 携帯090-1152-3889 メールyoneda760@rml.co.jp

## がん検診受けてますか？

2020年度に実施したがん検診の受診者数はコロナ禍前の2019年と比べると約2割減、がん発見数も2～3割減になったようです（2022年4月 日本対がん協会発表）。

年齢別にみると、60歳未満は10%前後の減少でしたが、60歳以上では20～30%減と減少率が大きくなっています。新型コロナの感染リスクが高い高齢者が受診を控えたとみられています。

下図はがん5年生存率の年次推移です（全部位・男女計。国立研究開発法人国立がん研究センター公表データより作成）



1990年代前半には50%前半だった生存率は2010年になると65%近くにまで上がってきています。

このグラフを見ると早期発見がいかに大切かがわかりますね。検診をしっかりと受診することは勿論、がん保険の確認も忘れないようにしておきましょう。

## ちょっと気になるお金のコラム

### 4630万円で何年生活できる？

4630万円の誤振込は大きな話題になりましたね。今月は、4630万円で何年生活できるかシミュレーションをしてみたいと思います。

下表は4630万円を30年と66年、それぞれの期間で取崩しをした場合の月額取崩し可能額です。

30年というのは一般に老後資金として想定しておいた方が良いと言われている期間、66年は誤振込を受けた人が90歳になるまでの期間です（税金は考慮していません）。

運用利回り	30年	66年
0%	128,611	58,460
2%	170,849	105,162
4%	220,309	165,697
6%	276,211	234,870

0%・66年の場合の取崩し月額額は約58,000円。本当の老後ならまだしも、20代からの一生分と想定すると、他に収入がないと少し難しいかな、という印象ですね。

当然ですが、運用利回りを上げていくと毎月の取崩額も増えていきます。6%の場合だと約23万円なので一人暮らしであればなんとか生活できるかもしれません。

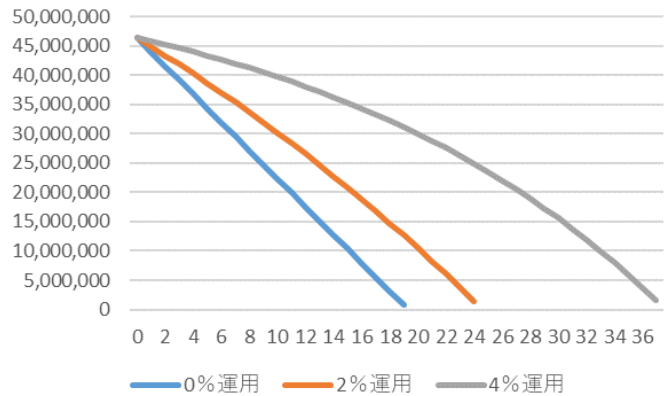
30年の場合だと0%でも約12万円です。厚生年金の加入者であれば、年金と合わせて約30万円程度になります。住宅の状況、介護などの状況にもよりますが何とか老後生活は送れそうですね。

注) 年金受給額は加入期間、納付保険料により異なります。

表をみて気づくと思いますが、30年と66年の差額が0%だと約7万円、6%だと約4万円と少なくなっています。利回りが高くなり期間が長くなると長期の複利効果が出てくるのが理由です。

金額を固定した場合の利回りによる違いについても見てみましょう。

下図は4630万円を0%、2%、4%で運用しながら年間240万円ずつ取崩した場合の資産額の推移を表しています。



0%の場合、毎年単純に240万円ずつ減っていくので20年目には底をついてしまいます。一方、運用しながら取崩した場合は、資産の減るスピードが遅くなります。

2%の場合に底をつくのは25年目、4%の場合には38年目と資産寿命が延びていることがわかります。

老後資金は、何年分必要かが確定していないところが準備を難しくしています。

公的年金の受け取り方も含め、どのようなゴール設定をすれば良いか確認したい方はご相談ください。